

---

# ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編～レナ視点～

ファリナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編〜レナ視点〜

### 【Nコード】

N49280

### 【作者名】

ファリナ

### 【あらすじ】

昭和58年6月。

寒村、雛見沢村に引越してきた少年、前原圭一は地元の女の子四人、竜宮レナ、園崎魅音、古手梨花、北条沙都子と出会う。

原作「ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編」のレナ視点で書いた小説です。

ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編 〱レナ視点〱

第1話 「部活」

朝。いつものように私は彼を待っていた。

私の名前は竜宮レナ。でも、これは本名じゃない。竜宮礼奈、が私の名前。

いろいろあって名前を変えた。あまり思い出したくない過去のせいだ。

「あ、圭一くん、おはようー！」

私は走ってくる彼に向かって手を振る。

「相変わらず早えな、レナ。たまには寝坊したってかまわないんだぜ？」

「そ、そんなことしたら、圭一くんを待たせちゃうじゃない」

「ん、そんな時は置いてく。さくさく置いてく。きりきり置いてく」

「ひどいよう……いつも待っててあげてるのにー……」

私にいじわるばかり言っている彼は前原圭一くん。ついこの間こゝろ、雛見沢村に引越してきたばかりの男の子。

まだ会って数日しか経っていないのに、私は彼とても仲良くなっていた。

ふと、圭一くんが立ち止まる。

「嘘。待っててやるよ」

「ふえ……？」

「ずーっと待っててやる。いつまでもな」

「は……はう……あ、ありがと……」

こんなこと、毎日やっていることなのに、楽しい。圭一くんという時間はとても楽しい。

でも、もっと楽しい時間がある。

「二人とも、遅いよー！」

「わあ、魅いちちゃんおはよう!」

彼女は園崎魅音ちゃん。とっても元気で私たちより一つ年上の女の子。

「レナ、おはよ!圭ちゃんは何年ぶりだっけえ〜…?」

「何年って、二日しか休んでねえよ!」

これもいつものこと。魅いちちゃんは圭一くんのことをかなり気に入ってるみたい。

「二人とも、早くしないと遅刻しちゃうよ?」

歩きながら、会話をして。笑い合っつて。ふざけ合っつ。

こんな日々がずっと続くことを私は信じている。

学校に着き、魅いちちゃんと圭一くんが教室の入口前で立ち止まる。

「圭ちゃん、お先にどうぞ」

「どうしたのかな?圭一くん…」

私がドアに近づこうとするのを圭一くんが止める。

「下がってる、レナ。奴だ」

「やっぱり沙都子ちゃんなんだね」

上を見上げる。ドアの隙間には黒板消しが挟まっていた。

それだけじゃない。引き戸には大量の画鋏がテープで貼付けられていた。

「見切ったぜ。沙都子……今回は俺の勝ちだあー!!!」

引き戸が思いつきり開く。足元には縄跳びが仕掛けてあり、目の前には硯が…。

「圭ちゃん、避けて!」

魅いちちゃんが叫ぶ。圭一くんは体を捻って避けた。

「をーっほっほっほ。朝から賑やかでございますこと」

「沙都子、てめえー……痛たたた……」

「みい、痛い痛い飛んでいけーなのです」

いつもの朝。いつもと変わらない光景。

「おはよう、沙都子ちゃん、梨花ちゃん」

「おはようございますわ」

「レナにおはようございます。みんなにもおはようございますですよ。にぱ〜」

梨花ちゃんの可愛さに私は暴走。

圭一くんは罫を仕掛けた沙都子ちゃんにデコピンを。

この賑やかさは放課後まで続いた。

「今日は圭ちゃんを部活に加えようと思う。何か意見はある?」

当然、みんなは圭一くんを受け入れた。

「おめでとう、前原圭一くん。君も今日から我が部の一員だっ!」

「部活ってなんだよ?」ってか、勝手に話を進めるな!」

「我が部では……」

いつものように魅いちゃんが説明をする。で、結局は、

「つまり、みんなでゲームをして遊ぶ部活動なのです」

梨花ちゃんが一言でまとめて説明終了。

「で、今日の部活は何かな?」かな?」

「今日はシンプルに……」

魅いちゃんがロツカーを漁る。そして取り出したのはボロボロにな

ったトランプ。

「誰でも簡単にできるジジ抜きでいこうか!」

「罰ゲームは何ですの? 魅音さん」

そう。この部活はただ遊ぶだけの部活じゃない。

最下位には罰ゲームが待っているのだ。

「罰ゲームはこの油性ペンで顔に落書きで!」

「よっしゃ! 絶対負けねえからな」

まだ気付いていない。圭一くんは勝てるはずなのに……。

「それにしても、ずいぶんボロボロだな、このトランプ……」

私たちにはわかる。ジジが何のカードか。圭一くんが何を持っているか。

「まさか、この傷でどのカードかわかるとかじゃねえだろうな……?」  
ニヤリ。

みんなで笑う。この勝負、圭一くんが最下位になるだろう。

「いぎやあああああ!!!」  
結果は私が予想したとおり、魅いちゃんが一位で圭一くんが最下位。敗者には罰を。魅いちゃんがペンを用意し、私、梨花ちゃん、沙都子ちゃんの三人で圭一くんを押さえる。

「覚悟しててよね、圭ちゃん。くくくくく……」

「や……やめろおおっ!!!」

圭一くんの叫び声が学校中に響いた。

帰り道。私と魅いちゃんは笑いを堪えるのに必死だった。

圭一くんの顔には魅いちゃんの描いた落書きが。

「っと、私は向こうだから」

いつの間にか分かれ道。魅いちゃんは笑いを堪えながら、

「今度の休みにこの村を案内してあげるよ」

「あ、それ、いいね。圭一くん、土曜日暇かな?かな?」

「おう、暇だぞ」

「じゃ、また明日ね!圭ちゃん、それ家に帰り着くまで消さないこと!いいね?」

「わかつてるよ!」

「じゃあね、魅いちゃん!バイバーイ!!!」

魅いちゃんと別れて二人きり。

圭一くんの顔を見る度に私は笑いを堪えていた。

目の前に圭一くんの家が見える。

「それじゃ圭一くん、また明日ね!」

「またな!」

私は急いで家に帰り、土曜日に持って行く弁当の買い出しに行くことにした。

ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編 〱レナ視点〱

第2話 「バラバラ殺人」

「圭一くん、こっちこっち！」

今日は土曜日。私は圭一くんはこの村を案内してあげている。いつもの場所に着くと、魅いちちゃんが待っていた。

「レナ、その荷物は一体……」

「えつとね、お弁当だよ」

「何人分だよ、それ」

「だって、圭一くん男の子だから、いっぱい食べるかなあ……って」  
話ながら向かった先は神社。この村の守り神“オヤシロ様”が奉られている。

この場所からは雛見沢村全体を見渡すことができる。

そしてこの神社は梨花ちゃんの家でもある。

「来週の日曜日にはここでお祭りがあるんだよ」

「もちろん、今年もやるよ！」

「やるって何をだよ？」

「綿流祭四凶暴闘！……圭ちゃんも入るから、五凶暴闘か」

「すげえネーミングセンスだな、魅音。で、何するんだ？」

魅いちちゃんが長々と説明していると、

「つまり、屋台巡りをしながら部活をしていくのです」

梨花ちゃんがまとめて説明してしまう。

「人様のお庭で何してるんですの！？」

奥から沙都子ちゃんも出てくる。

人様のお庭って、一応公共の場なんだけどなあ……。

「沙都子、ここはみんなのお庭なのですよ？」

「そうですね……」

私はお弁当の準備を始める。もうすぐお昼だ。

「梨花ちゃんと沙都子ちゃんも一緒に食べようよ」

「そのつもりですよ！」

「沙都子の分も俺がいただく！」

「みんなの分もちゃんとあるから」

結局、争い事が始まってしまふ。

最後に私がデザートとしてうささんリンゴをあげた。

そして、梨花ちゃん、沙都子ちゃんと別れ、三人で帰り道を歩く。

「魅力ちゃん、またねえ！」

私は大きく手を振る。

「ねえ圭一くん」

「なんだ？」

「この後、暇……かな？かな？」

行きたい場所がある。

「あのね、付き合っしてほしいの」

「いいぜ」

私はスキップしながら圭一くんの前に行く。

私の行きたい場所。それはダム工事現場跡地。今はゴミ捨て場になっている。

「はうゝ、新しい山ができてるうゝ」

駆け足で山を登って行く。その後ろを圭一くんが追い掛けて来ようとしていたが上手く登れないようだ。

「いいよ、圭一くんはそこで休んでて！」

私は頂上に辿り着くと、

「今日は何があるかなあゝ」

そして下を見ると、ケンタ君人形が埋まっていた。

「はう、これじゃあお持ち帰れないよう……」

諦めて、圭一くんの前へと戻ると、富竹さんと圭一くんが話をしていた。

「圭一くん、お待たせ」

「おっと、それじゃ僕はこれで帰らせてもらおうよ。じゃあね、圭一」

「圭くん」

圭くんを見ると、何か考え事をしている感じに見えた。

「なあ、レナ」

「何かな？かな？」

圭くんがこつちを見る。

「あそこつて、何があつたんだ？」

「えっとね、私もよくは知らないんだけど、昔ダムの工事をやってたんだつて」

「ダムの工事、か。なあ、その時にさ、何かなかつたのか？例えば……」

圭くんは躊躇いながらも私に聞く。

「事故とか、事件とか……」

「知らない」

何故そんなことを知りたがる？圭くんは知らなくていい。余所者の圭くんは……。

「私もね、転校してきたばかりなの。だから詳しくは知らないんだあ……」

というのは嘘。

転校してきたばかりというのは本当のことだけど。本当は知っている。ダム工事現場で起きた事件。

ダム工事現場の監督がバラバラにされ、犯人たちはそれぞれ腕、足首、胴を持ち去り、隠した。だが、リーダー以外は全員捕まり、リーダーは行方不明。彼が持ち去った右腕も未だ見つかっていない。

この事件が起きたのは4年前の綿流しの日の夜。そのため、オヤシロ様の祟り”と呼ばれるようになった。それから、毎年、綿流しの日には必ず一人が死に、一人が消える。雛見沢村連続怪死事件、通称”オヤシロ様の祟り”。

「じゃあ圭くん、また明日ね」

「おう、また明日な」

もうすぐ綿流し。今年是谁が死んで、誰が消えるのか。

それとも、何も起きないまま過ぎてゆくのか…。  
私は一人、家へと向かって歩き続けた。

ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編 〱レナ視点〱

第3話 「綿流祭」

今日は待ちに待った綿流祭。私はいつものように圭一くんの家の前で待っていた。

数分経ってから圭一くんが出てくる。

「早く行こっ！みんな待ってるよ」

「おう」

二人で古手神社まで走る。途中魅いちちゃんと合流し、さらに走った神社に着くと、梨花ちゃんと沙都子ちゃんがいた。

梨花ちゃんは巫女服姿。かぁいいなあ……。……。

「みい、レナがボクのことをジーツと見つめているのです」

「お……お持ち帰りい……。……」

「レナ、それだけはだめだ」

「ええ……。ちよつとだけえ……。……はう……。……」

私が暴走するのを、圭一くんが止める。それが私は嬉しかった……。

「さ、今年もいくよ！綿流し五凶暴闘！！」

「「おー……！！！！」」

毎年やっているこの部活動。でも、いつもと違うのは圭一くんがいること。

圭一くんがこの難見沢に来てくれて本当によかった……。

「あつ……。熱っ！アチチチ……。ツ！！」

「圭ちゃんっ！？大丈夫！？」

不意に魅いちちゃんの叫び声が聞こえた。

たこ焼きの早食い競争。圭一くんが火傷したらしい……。

「実においしくないのです」

梨花ちゃんがそう呟く。たこ焼きの次は綿あめ。次にかき氷……。……。  
屋台を見て回っていると、かわいい大きなクマのぬいぐるみを見つ



るときに会った。そして、今日だけ特別に、と魅いちちゃんが部活に誘った。

パン！パン！パン！

三発連続当たる。

「圭一くん、今だ！」

「あ、はい！」

パン！パン！パン！

続けて三発当たる。すると、クマさんが倒れ…。

「や……やったあ！」

見事にクマさんを取ることができた。

「レナ、やるよ」

圭一くんがクマさんを私に差し出す。

「わあ！あ、ありがとう！」

それからは、梨花ちゃんの奉納演舞を見、終わった後に沢へ綿を流しに行った。

気がつけば圭一くんとはぐれていた。私たちは圭一くんを探す。

「あ、富竹さんに鷹野さん」

「圭ちゃんも。探したんだよ？」

「ああ、悪い」

「でも、ちようどいいや」

そう言って魅いちちゃんがマジックを取り出した。

「富竹のおじさまが最下位ってことで、罰ゲーム！」

「ボクもおまけをもらっているの、最下位ではないのです」

「へ！？ば、罰ゲームって何をするのかな！？魅音ちゃん！！」

「くつくつくく……」

富竹さんはもう逃げられない。

「や、やめろおお……つて、あれ……？」

落書きをしたのは富竹さんの顔ではなく、服にだった。

今年こそメジャーデビューだね！魅音

それぞれが書いていく。

また遊びに来てくださいね。圭一

やーい、ビリ！沙都子

次は頑張りましょうです。梨花

「これじゃ、罰ゲームじゃなくて、寄せ書きだね」  
最後に私が書き、そのまま別れたのだった。

第4話 「祟り」

綿流しの次の日。

私たちはいつも通り部活をやっていた。

途中、圭一くんが先生に呼ばれた。

「何だろ…？」

「何かやらかしたんじゃないの？」

それからどのくらい経ったのか、窓の外を見てみると、圭一くんと知らない人が車内で話しているのが見えた。

「何の話してるのかなあ…？」

「さあね」

時間はどんどんと過ぎてゆく。

圭一くんが戻ってくる頃にはお開きになっていた。

「ほう、部活、圭一くんいなかったから、レナ負けちゃったんだよっ？だよっ？」

「すまん、レナ。次は頑張ろうな」

「うんっ！」

その夜、魅いちちゃんから電話がきた。

何事もなく、終わってほしかった綿流祭。けれど、やはり事件は起きてしまった。

私は魅いちちゃんから聞いた。富竹さんが喉を掻きむしって自殺。鷹野さんはどこかの山奥で焼死体として発見されたらしい。

学校でその話を知っているのはほとんどいない。古手家頭首の梨花ちゃんと、園崎家次期頭首の魅いちちゃんと私くらいしか知らない。

「くあ〜……」

「うわあ、圭一くん大きなあくび。かあいいよ」

「昨日、テレビ見すぎて眠れなかったんだよ…くあ…」  
そのまま圭一くんは机に伏せてしまった。

「ここで騒ぐと圭一の邪魔になってしまうので、離れましょうです」  
「梨花の言うとおりですわね…」

私たちは圭一くんの元を離れた。

少ししてから魅いちゃんが突然、

「綿流しの晩に失踪したらしいよ」

圭一くんに聞こえるくらいの声で…。

「富竹さん…富竹さんの…」

私もそれに合わせる。

「私の知る限りではね…」

「他にもいるんでしょ…?」

「彼女が祟りにあったのか、鬼隠しにあったのかはわかんないけど  
ね…」

鬼隠し。他の地方では神隠しと呼ばれるもの…。

「誰にせよ、もう一人いるんだよね?だよね…?」

「オヤシロ様なら、ね」

圭一くんには聞こえてしまったと思う。そんなのは分かっているはず。

だから、早く話を終わらせたかった。もし、圭一くんがこの話を知っているのだとしたら、怖がらせたくない。

「次は…レナ、かな…」

だから。次の犠牲者が私だと。確信したように。

「大丈夫だよ。レナはちゃんと帰ってきたよ」

「でも、悟史くんはだめだったんでしょ?」

「昔の話だよ。…もうやめよ、この話…」

「うん…」

それから、圭一くんが椅子から立ち上がるうとしたら、上から靴が降ってきた。

沙都子ちゃんの畏。そんなこと、誰もが知っていた。

その後はいつものように時間が過ぎていった…。

第5話 「嘘つき」

「あつちやあ〜…」

「魅いちちゃん、どうしたの？」

私が部活の用意をしていると、魅いちちゃんが突然声を上げた。みんなも魅いちちゃんの方を見る。

「ごつめーん、今日バイトが入っちゃってさ…。部活、できないや」

「そつか、じゃあ仕方ねえな」

圭一くんは残念そうに私と片付けを始めた。

「それじゃ、わたくしたちも買い出しに行かなければなりませんので、お先に失礼させていただきますわ」

「また明日なのですよ、にば〜」

沙都子ちゃんと梨花ちゃんも出ていく。

教室には圭一くんと私の二人だけ。

黙々と片付けていると、圭一くんが私に尋ねてきた。それはあまり話したくないもの…。

「なあ、`悟史”って誰だ？」

「知らない」

即答する。別に知られたくないわけじゃない。でも、`あの人”のことだけは話せない。

圭一くんが私を見る。私は慌てて言葉を続ける。

「あのね、その、私が転校してきたのと入れ代わりだったの。だから………」

「……そーかよ……」

「あ………」

答え方が悪かったのかもしれない。

片付けが終わり、二人で帰り道を歩く。気まずい雰囲気はどうにかしようと話題を探していると、圭一くんが口を開いた。

「…いつになったら、俺は仲間って認められるんだろっちなあ……」  
それは独り言だったのかもしれない。

「なあ、レナ」

「何？」

「レナも転校生だったんだよな？」

何を今更、と思ったけれど…。

「うん、そうだよ」

「その時は…どんな感じだった…？」

「あのね、最初はすっごく不安だったんだけど、魅いちちゃんとかいろいろ教えてくれて…」

「嘘や隠し事はされなかったのか…？」

圭一くんが何を言っているのかわからない。嘘？隠し事？

「なあ、お前たちは俺に嘘や隠し事、してるよな？」

「してないよ…」

そんなこと、するはずがない。だって圭一くんは私たちの仲間なんだから…。

「そ…そういう圭一くんはどうなのかな？かな…？」

逆に問い掛けてみる。

「お、俺はしてないよ、嘘も隠し事も…っ」

「それ、嘘…：だよね」

だって私は見ていたから。圭一くんが知らないおじさんと車の中で話しているのを…。

「あの時、何の話をしてたの…？」

お願いだから、嘘つかないで…。

「み、みんなには関係のない話しだよっ！…！」

何かに怯えるように。圭一くんは叫んだ。関係のない話……。違う。きつと、私たちの。。。

「嘘だっ！」

私も叫んでいた。

幸せな日々が続くと信じていた。けれどそんな願い、叶うはずはない。

圭一くんは震えていた。怯えた目で私を見ていた。

「圭一くんにも嘘や隠し事があるように、レナたちにもだってあるんだよ……？」

ひぐらしの鳴き声だけが辺りを埋め尽くしていく。

私だって、隠し事くらいある。過去のこと……。

雑見沢に来る前、学校で男子生徒三人を金属バットで殴った事件。

母親のせいで起こしてしまった事件。

他にもたくさんある。

「涼しくなってきたし、そろそろ行こっか」

場の雰囲気を変えようと、明るく言った。けれど、圭一くんは怯えたまま、その場で膝をついていた。

その夜、私は圭一くんの様子を見に行こうと、前原家の前に立っていた。

ピンポン。チャイムを鳴らして中から出てきたのは圭一くんのお父さん。

「あの、圭一くんいますか？」

そう尋ねると、私は二階へ案内された。圭一くんの部屋の前。

中に入ろうとして、ふと聞こえたのは圭一くんの声。

誰かと電話しているみたいだ。耳をすませ、内容を聞いていると。

それは、私のこと。それから、「鬼隠し」のこと。

「……………っ！」

1時間くらい経ってから私は階段を降りた。

途中、圭一くんのお父さんとすれ違ったけど、私は気にせず帰る。

圭一くんは仲間だったはずなのに……。私は彼に裏切られたような気がしていた。

第6話 「お見舞い」

いつもどおり学校へ行こうと圭一くんを誘いに来た。

けれど圭一くんは風邪を引いてしまったらしく、私は一人で行くことになってしまった。

「魅いちちゃん、おはよう」

「おはよ、レナ！…って、あれ？圭ちゃんは？」

「あのね、圭一くん風邪引いちゃったんだって」

「ありゃ、そうなんだ。圭ちゃんがねえ〜…」

魅いちちゃんと二人で学校へ向かう。

いつもと変わらない時間。ただ違うのは圭一くんがいないということとだけ。

放課後、魅いちちゃんとお見舞いに行こうということになり、魅いちちゃんの家でおはぎを作っていた。

「ねえ、タバスコ入れてみない？一個だけ」

「圭一くんがかわいそうだよ…」

「いいじゃんいいじゃん。今日学校を休んだ罰ってことで」

そして、圭一くん家に着く頃にはもう日が暮れていた。

魅いちちゃんがインターフォンを押す。数秒してから圭一くんが出てきた。

「レナ…魅音もどうしたんだよ…？」

「今日圭ちゃん学校休んじゃったでしょ？だから…」

「お見舞いに来たんだよ、だよ」

圭一くんは私たちに心配させまいと無理矢理笑顔を作っている。

「あ、そうそう」

魅いちちゃんがおはぎの入った箱を圭一くんに差し出す。

「これ、私とレナで作ったんだよ。それでね、アルファベットが付

「いってるから、その中からレナの作ったのを当ててほしいんだ」

「おいおい、部活なのかお見舞いなのかはつきりしろよ」

「三人で笑い合う。いつものように。」

「でもよかった。圭一くん、元気そうで」

「そろそろ帰るか」

「うん」

「私たちはそのまま立ち去ろうとした。」

「あ、そうだ。圭ちゃん、今日のお昼は何食べたの？」

「え……外で、だけど……」

「体調が悪いのに外食なんて……。そういえばこの前、圭一くんが誰かと話しているのを見かけたような……。」

「一人なわけないでしょ？この前学校でお話してた人？」

「な……なんで知ってるんだよ……っ？」

「圭一くんは怯えてる。それは、何に怯えてるのだろうか？私たち？それとも……。」

「私、見てたの。窓の外で圭一くんが知らない人と車に入っていくのを……」

「それって警察っしょ？」

「えっ、そうなの？」

「なんで警察が圭一くんなんかと話してたの……？意味がわからない。」

「圭一くんの顔は真っ青になっていた。別に知っていたところではないのに怯えるようなことじゃないのに。」

「魅いちちゃん、そろそろ帰ろうよ」

「そうだね」

「私と魅いちちゃんは帰ることにした。」

「圭ちゃん、明日学校休んじゃ嫌だよ……？」

「その一言を残して、私たちは圭一くん家から離れていく。」

「圭ちゃん、レナのやつわかるかねえ……」

「魅いちちゃんのよりきれいに作れたから、すぐにわかっちゃおうと思っよっ。」

「ちよ、レナあ〜！」

「あははは」

明日、圭一くんが学校へ来てくれるといいなあ…。そうして、私たちは帰って行った。

次の日、私は圭一くんと一緒に学校へ向かう。

昨日の出来事を圭一くんに話す。それから

「あ、昨日のおはぎの問題、どれがレナのかわかった？」

圭一くんは戸惑いながら、

「食欲がなくなつてさ、食べてないんだ…」

「そつか。なら、罰ゲームだね」

私は笑顔で応える。

学校に着くと、早速沙都子ちゃんのトラップが圭一くんの頭に直撃。黒板消しが当たって、圭一くんの頭が真っ白に。

「をーっほっほっほ！見事に引っ掛かりましたわね、圭一さん！」

「みい、圭一、顔色が悪いのですよ？」

「うん、まだ本調子じゃないみたいなの。だから、手加減してあげてね？」

先生が来る前にトラップを片付ける。

授業中も圭一くんはボーツとしていた。休み時間にはお昼も食べず、ずっと眠っていた。

午後の授業が終わる。魅いちちゃんが部活の用意をしていると、圭一くんが帰ろうとしていた。

「あれ、圭ちゃん今日も直帰なの？」

「…俺のことは放つといってくれ…」

そのまま圭一くんは出ていってしまった。

残された私たちも、五人揃わないと楽しくないということになり、帰ることにした。

「では、また明日ですわ」

「また、明日、なのですよ。にば〜」

二人と別れ、魅いちちゃんと歩く。いつもなら、圭一さんと魅いちちゃんと私の三人で歩いている帰り道。けど今は圭一くんはいない。話すこともなく、ただひぐらしの鳴き声だけが響き渡っていた。

今日もいつものどおりの日。学校で授業を受け、放課後になって……。いつもと違ったのは、部活がなかったこと。圭一くんが一人で先に帰ってしまったこと……。

私は夜に圭一くんの家へ向かった。夕飯を持って。

「圭一くうーん」

ピンポン、ピンポン……

私は何回も押す。しばらくして、圭一くんが中から出てくる。

「何の用だよ、レナ？」

「お夕飯、一緒に食べようと思って作って来たの」

「え……っ？」

今日は圭一くんの両親はいない。昨日セブンスマートで話していたから知っている。

圭一くんは嘘をつく。

「圭一くんのお夕飯、カップラーメンでしょ？」

「な……っ！？」

「好き、なの？とんこつシヨウガ味」

これは、圭一くんが箱買いしてもらっているのを見ていたから、知っている。

「ねえ圭一くん、一緒に食べよ？この鎖、外してよう……」

無理矢理手を入れて、チェーンに触れる。すると、圭一くんが思いっきりドアを閉める。

「きゃっ！ー！い、痛いよ、圭一くん……私が悪かったのなら、謝るから……っ！」

雨が降る中、私は謝りつづけた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめん、なさい……っ」  
泣きながら謝り続ける。何十分立ち続けていたのかもわからない。

気づけば私は自ぎにいた。

最終回 「私を信じて…」

次の日、圭一くんは素振りをしていた。けれど私は関わりたくない。だから気にせず教室へと向かっていく。午後の部活もなく、圭一くんは帰っていく…。私はそのあとを追い掛けた。バットに対抗するための鉈を手にとって。

圭一くんが立ち止まる。そして振り返って…

「…ひっ!?!?」

「圭一くん…なんでそんなに怯えるの…?」

私はいつもどおりに話し掛けていてだけのはずなのに…。何故なの?何が怖いの?

「そ…その鉈はなんだよっ!?!?」

ああ、そういうことか…。

「宝探しに行こうと思って。圭一くんこそ、そのバットは何なのか…かな…?」

理由なんて知っている。だって一年前 悟史くんがいなくなってしまう前にも同じことがあったから…。

「な…なんだっていいだろ!?レナだって、そんなの嘘だろっ!?!?」

「うん…嘘だよ…。レナは圭一くんを救ってあげたいから…」

「救うってなんだよっ!?!?」

「圭一くん…怖がらないで…」

私が一歩近づくと。圭一くんは一歩下がる。

「く…来るなあっ!?!?!?」

圭一くんは走っていった。私は一人残された。圭一くんを救えるのは私だけ。

圭一くんの後を追ってみると、そこには倒れている圭一くんの姿が

…。  
「け…圭一くん、大丈夫っ!?しっかりして!!」  
私は彼を彼の家へと運んでいった。

「魅いちゃん、圭一くんが倒れちゃったの」

『ええ!?わかった、今すぐ行くよ』

魅いちゃんに連絡した後、すぐに入江先生に圭一くんのことを伝えた。

「レ……レナっ!?なんで……っ!?!」

圭一くんは怯えながら私を見る。

「圭一くん、寝てなきゃだめだよ」

私は彼を怖がらせないように優しく話しかける。そんなことをしているうちに魅いちゃんが部屋に入ってきた。

「やつほー!圭ちゃん、生きてるう〜?」

「魅いちゃん」

「ど……どうして魅音もここにいるんだよ!?!」

驚く圭一くんに私が言う。

「私が電話したんだよ」

「レナ」

魅いちゃんが私を呼んだ。

「監督には電話した?」

「うん、したよ。魅いちゃんに電話した後すぐに」

「監督…って誰だよ…っ?」

そういえば、圭一くんは知らないんだっけ。

「監督は監督だよ。」

「工事現場の監督とか、野球チームの監督とか…」

今言ったのは例え。私たちの監督は診療所の入江先生。

入江先生は雛見沢ファイターズという野球チームの監督でもある。

「さて、監督が来る前に済ませちゃおっか」

「うん、そうだね」

「す、済ませる…って何をだよ？」

「あれ、圭ちゃん？まさか、忘れちゃったとか？」

済ませるっていうのは、おはぎの宿題の罰ゲーム。圭くんは私の作ったおはぎを当てられなかった。だから、「罰ゲーム」。

魅いちちゃんを取り出したのは油性のマジック。

「富竹さんと、同じ目にあってもらうよ」

私が圭くんを羽交い締めにする。罰ゲームの内容は綿流しの日に富竹さんが受けたのと同じ。

圭くんの服に好きな言葉を一言。

「はやく、元気になあれ」

魅いちちゃんが言った、その直後。私は一瞬何が起こったのか、理解できなかった。

圭くんが金属バットで魅いちちゃんの頭を一発。魅いちちゃんはそのまま動かなくなってしまった。

私も殴られる。そう思っていた。けれど、私は逃げなかった。

圭くんを怖がらせないように。優しく、微笑んで。

「圭くん、落ち着いて」

金属バットが当たる。痛い。でも、泣いちゃだめだ。

「大丈夫だから」

優しく声をかける。たとえ、この声が彼に届いていないとしても。

痛い。それでも、泣かない。だって圭くんの抱えている痛みに比べたら、全然だから。

「ねえ、圭くん」

泣かないと決めたのに。私の頬を一粒の涙が伝う。

「お願いだから」

届いてなくてもいい。でも、私の話を聞いて。

「私を、信じて…」

最後の一降り。私は頭を庇わず、彼に手を差し延べた。

守れなかった。大好きだった彼を守ることができなかった…。初めて彼と出会ったときから好きだった。

彼と初めて部活をやった日も。登下校をしたことも。

そんな日々が続くと信じていたのに。

圭くん。今度また会えたなら、君に伝えたいことがあるの。

私はね、あなたのことが

大好きだよ。

完



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4928o/>

---

ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編～レナ視点～

2010年12月30日18時45分発行